



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



船本進氏(朝日塾中等教育学校 数学科)

入試広報部長 学年主任。MYPで5年間、高2 数学(普通科)を教える。
現在は中1 数学担当。

「相手にどう見えるか、どう伝えるかを意識するコミュニケーション。自分も一緒に学んでいく姿勢でIBを楽しんで教える。」

アプローチの仕方が違うIB教育で新たな評価基準を 共有する事で、生徒の学びの姿勢が変わった

国際バカロレアに関しては8年前に講習や研修を通して、シュタイナー教育、モンテッソーリ教育などと共にアクティブラーニングを考える研修でその教育方法を知りました。

その2年後に、自身の中等教育学校(中高一貫校)でもIBを導入することになりました。その際は国際バカロレアとはどのようなカリキュラムか詳しくは分かりませんでした。まずは仙台でMYP数学のワークショップを受講し、その後、大阪でCASのワークショップを受講しました。

そこで受けた数学のワークショップでは、アテネ出身の先生の授業が行われ、日本の教育とはかなり違うのを感じました。例えば課題の出し方です。普通なら覚えた事を反復させるトレーニングしていきますが、MYP数学では、覚えた知識を使って何ができるかという課題でした。その場合、期日までに結果が出ない場合はどうするかと聞いたところ「どこまでも待つ」とのことでした。

日本では、課題を出させるために様々な手段を使いますが、どこまでも待つという姿勢には大変驚きました。数学は積み上げであるので、「一つの単元の課題が済んでいないときに、次の課題はどうしているのか」と質問したところ、「生徒の答えを待っている間、別の単元をやる」と応えてくれました。再び私が「そうすると2つの単元を同時にやることになるが、その場合はどうしているのか」など次々に質問したところ、そのワークショップの先生に、「あなたは私の息子みたいに多くの質問をするのね」と笑いながら言われました。こういったワークショップ自体が、IBの学びに繋がっていたのだとのちに気づかされました。

その後の実際の授業で一番変化した点は、生徒にとって評価基準(成績の付け方)が分かりやすくなったことです。これまでの評価の基準はテストでしたが、MYPは観点別評価です。発表や取り組む姿勢を評価(点数化)することは難しく、先生によって評価が異なることもあります。しかしルーブリックを作り、それを教員と生徒が共有することで評価基準が可視化され、生徒にとっても授業の進む方向がわかりやすくなり、意欲的になりました。

数学において違った取り組み姿勢を導入する事で 実社会で役に立つ力をつけていく生徒達

IBの数学ではコミュニケーションのとらえ方が異なります。コミュニケーションは、話し合うのではなく、相手にどう数学的表現が伝わるかを意識します。身近な事象を式で書いて、実証するなど実社会の状況と照らし合わせてプレゼンテーションをするという試みでは、生徒たちは私たち教員には予想しないような気づきを発表していました。

IBのアプローチの仕方は、日本の数学とは異なるので、授業では発表を頻繁にしてもらっています。生徒は「相手にどう見えるか、どう伝わるか」という意識を持って準備する事で、本当に発表が上手になったと思います。こういったスキルは社会に出たときにもきっと役に立つと思います。そういった視点を既に身に着けた彼らは、IBの描く学習者像に達しているように思います。

また、基礎的な学力においても定着度が違いました。誰が何を発表したかなども彼らは詳細に覚えていて、生徒にとって能動的な学びになっていると感じます。数学という教科において、IB教育ではプレゼンテーション能力も身に

つけることができるのは、素晴らしいと思います。また学習指導要領とIBは親和性があると考えています。

教員相互のコミュニケーションの変化と

IB教育を新しく導入する事で考えられる教員の負担感

IBを導入してから、評価の場面でも教員相互の関係性が変化しました。これまでの数値だけでの評価では議論の余地はありませんでしたが、導入後は数学科の評価の場面でもお互いの考えを確かめ合う事が多くなりました。それによりコミュニケーションが増え熱く議論する会議となり、定例の1時間では終わらないときもあります。

また、教科横断型授業もIB教育の中で展開されています。本校では「立志式」という将来の夢への志を立てる式が中学2年生であります。決意文の作成には、学年の先生と国語の先生が担当していましたが今年度は数学科も加わって、発表の際に証明という数学的観点を取り入れることで説得力が増し、生徒の伝えたいことがより分かりやすく伝わるように構成できたと思います。教科を超えた学習では、他にも体育と芸術や理科とデザインなど行っていて、ミーティングを通して話す時間が増え、さまざまな教科とのつながりも増えています。

しかし、教員にとってIB教育を導入することで負担が増えるのは間違いありません。ポジティブな考えを持つ先生方は良い負担だと捉えられるようですが、緻密に計画をする先生方は大変だと感じているようです。新しい事をしても、失敗してもいいと思える先生の方が、IB教育を前向きにとらえられると思います。

即戦力になれるIB修了生に期待

コミュニケーションの上で「相手にどう見えるか、どう伝えるか」ということを念頭に置くIBの観点は素晴らしいと思います。利他の視点で、他人の喜びが自分の喜びになるという本校の教育目標ともつながっていると思います。

IBを学んでいる生徒たちは、大人と普段から関わっているせいか、大人と対等に話すことができます。卒業後、入社してから厳しい言葉をかけられ離職される方も多いと聞きますが、私はIB修了生は社会に出ても、物おじせず自分のアイデアを言うことができるので、即戦力になると思っています。卒業生は今年が初めてですが、どのように成長するかが本当に楽しみです。

今年度もMYPのパーソナルプロジェクトの指導教員を

しました。全くピアノを弾いたことのない生徒が「楽譜を見ずにピアノを弾くこと」に挑戦することがテーマでした。私自身も音楽の知識がありませんでしたので、生徒と一緒にゼロからスタートしました。

以前担当したプロジェクトでは、自分の得意なことを伸ばすというものでしたが、今回は本人の取組みたいという意思を大切に、練習練習の日々が始まりました。ピアノの事に関しては私も全く知らないことでしたので担当生徒と一緒にYouTubeで学びました。成果物の演奏発表までに、かなりかかりましたが、その過程は成長を感じることができ大変楽しかったです。「どのように伝えるか」という視点で撮影方法や舞台のセッティングを考える時間などを含めると約8か月かかったと思います。チャレンジに満ちた面白いプロジェクトで、生徒本人の達成感もひとしおでした。私にとっても大変勉強になりました。

ボランティア活動による地域社会とのつながり

地域におけるIB教育の認知度に関しては、学校の周りには高齢の方も多いのでIBを知らない方が多いですが、SAとして活動するようになり、以前よりボランティアを進んでやっている生徒の様子や挨拶に、嬉しい様子で応援してくださっています。エコボランティア活動も以前はやらされている感じで、嫌々やっていましたが、今では汗だくになって清掃活動をしていく様子に変わっています。それは、生徒主体になり、目的意識が変わったからだと思います。

IB教員へのアドバイス

IB教育では教える大人が楽しくしていないと、子どもたちも楽しくないので、お互いに楽しんでやるということが大切かと思います。教師が失敗しても子どもたちと一緒に成長すればよい。授業の良い部分を自信に代えて、IB教員が学びを楽しむことで子どもたちもついてくると思います。

IBを教えることに迷っている方には、ぜひ挑戦して欲しいと思います。初めてやることに挑戦することは大変だとは思いますが、一歩踏み出すことが大切だと思います。0から1にするために、まずはIB教育の良い所のみ授業に取り入れてみるのはいかがでしょうか。この教育を研究する価値は十分にあります。